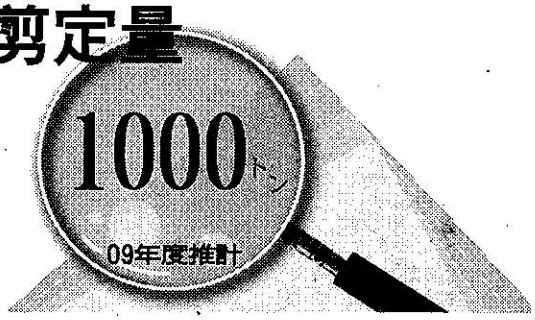
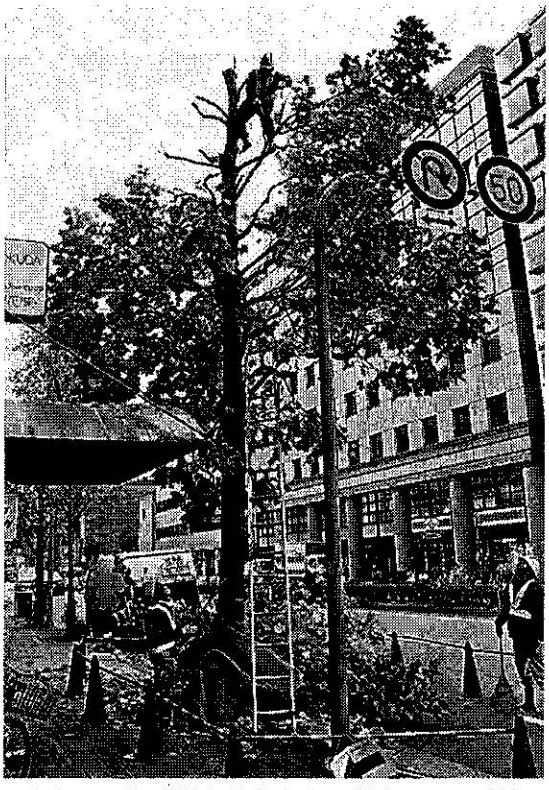
初冬彩り 資源化へ期待

京都市の街路樹 年間剪定量




烏丸通で街路樹を剪定をする業者。この季節の風物となっている（京都市中京区）

冬の深まりとともに色づきを増す街路樹。街並みに良好な景観を演出してくれるが、落ち葉をかき集めるのは一苦労だ。京都市内の大通りでも枝葉の剪定が進むが、どれくらい刈り取られ、枝や葉はどうなるのか。現状を探った。（社会部　上野正俊）

11月下旬、烏丸通ではスズカケノキやユリノキが剪定された。作業員が木に登り、枝を切ってはクレーンでトラックの荷台に運ぶ作業が市内のあちこちで見られた。

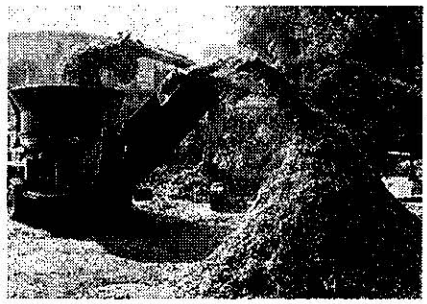
京都市は今年から、色づくときれいなトウカエデとイチョウの剪定の仕方を一部区間で変えた。これまで色づく前でもばっさり刈っていたが、9～10月に葉の量を半分ほどに減らし、12月に葉をすべて落とす2段階方式を試験的に導入した。落ち葉の量を抑えながら、長く紅葉が見られるよう工夫している。

市内に街路樹は約4万8千本あり、年間1万本ほど剪定する。市建設局緑地管理課では年間約1千トンの剪定枝葉が出ていると推計する。それでも「早く剪定して」といった苦情や問い合わせは年間約1600件届く。

市では入札で決まった造園関係の18社に、除草から剪定、枝葉の処分まで一連の作業を年間委託している。このため枝葉は焼却場に持ち込まれて燃やされたか、民間で再利用されているか、数量はわからないという。

焼却とリサイクルの境目となるのが、持ち込みごみの料金設定だ。市は10月に4年ぶりに値上げしたが、仮に1トンを持ち込んだ場合1万6500円（値上げ前は1万2800円）かかる。ごみ行政を担う環境政策局循環企画課は「焼却は持ち込み手数料以上に費用がかかる。民間で資源化してもらう方がありがたい」としている。

処理費上げ響き 「ごみ」回避の流れ


持ち込まれた枝葉を粉砕機でチップ化する。約1年かけ堆肥化する（京都市西京区の堆肥製造業者）

一方、リサイクルの現状はどうか。枝葉で堆肥を製造しているヨードクリーン（西京区）を訪れた。「この季節は持ち込みが多く忙しいですよ」と鈴木幹人社長（37）。トラックが出入りし、枝葉がうずたかく積み上げられている。公園や寺社などの枝葉を含め昨年は3200トンが持ち込まれた。搬入料金は1トンの場合、1万3000円（税別）だ。

枝葉は重機で粉砕機に投入しチップ化。自然の発酵菌の力だけで1年かけて堆肥にする。街路樹は枝、芽、落ち葉など部位が偏らないため高品質の土壌改良材になるという。同社では「京堆肥」の名でネットなどでも販売する。「枝葉も貴重な資源。循環社会に貢献できる」と同社の小石玖三主会長（63）は胸を張る。堆肥化はほかにもJA京都中央が左京区で取り組む。

市緑地管理課でも、委託先に対し、リサイクル業者に持ち込むよう呼び掛け始めた。「値上げの影響もあり今年は約半分がリサイクルに回っていると聞きます」（三宅義彦担当課長補佐）。ごみを減らし再資源化する。一石二鳥に期待している。

どようズ数ームアップ

京都市の街路樹　2009年3月現在、総本数4万8040本でイチョウ40・4％、トウカエデ16・6％、スズカケノキ9・9％、サクラ類8・4％、ケヤキ7％の順。1912年に烏丸通にユリノキを植えたのが始まりと言われ、現在も年間400～500本ほど増やしている。街路樹里親制度を設け、市民参加での整備活動も進めている。